
ロンドン・パリ & Puydu Fou の調査研究の意義

Meaning of the surveillance study of London・Paris & Puydu Fou

JEPC イベント総合研究所	小坂善治郎 (東京富士大学教授)
Jepc Event general laboratory	Zenjirou Kosaka(Tokyo Fuji University Professor)
JEPC イベント総合研究所	石山 盛也 (JEPC 専務理事)
Jepc Event general laboratory	Seiya Ishiyama(Jepc Representative director)

.はじめに

この度の研究は、一般社団法人日本イベントプロデューサー協会 (JEPC) と実践経営学会 (JSAM) 国際イベント研究会の主催で実施された。参加者は 11 名。期日は 9 月 8 日(土)から 16 日(日)の 9 日間である。

研究テーマは統一されていたので、スケジュールはきついくらいきっちりしていた。しかし、現地事情により、メンバーによって若干の別々の目的による行動を取ることもあった。それ故に、当初の統一テーマを全員が共有しつつ、多くの成果を生み出すことができた。小坂と石山が特に異なった行動を取ったのは、第 4 日目の 9 月 11 日(火)に清水卓治とともに ST.PANCRAS R, Hotel でのジェットロンドン所長有馬純氏とのロンドンオリンピックについての現地におけるヒアリングを中心としたシンポジウムであった。その日に引き続きの行動で、ロンドンオリンピックについて、Imperial College London と University of East London の訪問(当初は実践経営学会のルートでシンポジウムをする予定であった。しかし、予定された日がロンドンパラリンピックの諸行事などが続いており、大学等の使用の都合がつかず、別の方法で実施した。)を中心にロンドン市内にてロンドンオリンピックの現地におけるヒアリングを中心に行動した。

.調査研究の目的

大きな目的は 2 点となる。

1 つは、ロンドンオリンピック・パラリンピックの実際とその評価を現地での評価を確認することであった。さらに成熟都市(東京も同じ)でのオリンピックの開催の実際の確認調査である。

2 つは、オリンピック開催国イギリスの隣であるフランスでのイベントがどうであったかの確認である。

.調査研究の日程等の実際

この点について、調査研究チームのメンバーの研究報告があるので、その項に任せる。

.調査研究の結果

この点については、同行チームのメンバーの報告があるので、全てについては記述を任せる部分が多いことを前提とする。

1 . LONDON にて

この調査研究は、ロンドンオリンピックの直後であり、パラリンピックの開催中であったことにより、当初予定していたスケジュール(特に東ロンドン大学やロワイヤル大学でのシンポジウム等)の一部に変更を若干した。現地にてさまざまな当事者(大学関係者・ジェットロンドン事務所・JOC 等)のご配慮によって実際的な活動となった。それは、とても意義のあることであった。特質すべきは London Olympic の総合デザイン・設計された Buro Happold 社でのシンポジウムであった。

(1) BURO HAPPOLD 社 (9月10日 13:00~17:00)
2012 ロンドンオリンピックのユニバーサルデザインを担当した「BURO HAPPOLD」社を訪問した。

London に本社を置く世界的な総合デザイン・設計企業である。特に、2012 年の London Olympic の総括 Design を担当した。Olympic Park のデザインと Site- Infrastructure (Park 周辺の環境デザイン) の Master planes を実施した企業である。

この Plane の担当責任者や関係した方々が参加

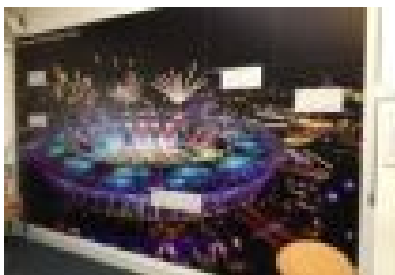


オックスフォードに事務所付近の街並み

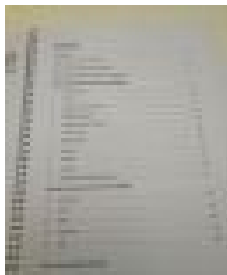
した。BURO HAPPOLD のミーティングルームでのシンポジウムである。

ロンドンオリンピックのデザインコンセプトは、London の東サイドの再開発 (東サイドは、例えば古い倉庫群とか古い住宅などが密集した環境であった) にポイントがある。また、オリンピック施設はメインスタジアムは8万人の収容が必要であ

ったが常時は必要ない。そこで6万人近い収容部分は仮設にして造られた。といったケースの



ようにオリンピック施設は、各会場ともさまざまな工夫を凝らした、と云う。実際には、このような実態はなかなか「どこからが常設で仮設部分はどこか?」といったようにまったく分からないようになっていた。



さらに、デザインのポイントはユニバーサルデザインに重点を置いたという。デザインメンバー



BURO HAPPOLD 社チーフプランナー・スミス氏と共に

は、事前に子供、高齢者、障がいのある方々との意見交換やシミュレーションを

繰り返したと云う。例えば、Q2Arena の屋根の部分には障がいのある人でも上ることのできる構造になっていた。

このシンポジウムでは、ともかく深い見識を具体的に展開してくれた。極めて有意義な機会であった。《この機会は、東ロンドン大学 (University of East London) やインペリアル大学 (Imperial College London) でのシンポジウムからの変更であったが、とても实际的であった》

(2) その他の現地調査研究地

Q2アリーナ、WENBLEY、WINBLEDON 等々は、同行メンバーの報告論文に任せる。

2 . Paris・Nantes & Puydu Fouにて

スケジュールにも有意義な機会を用意された。それは、Nantes にある Éditions La Machine 社での調査研究が可能になったことであった。パリ市民をあっと思わせた巨象の出現を演出した会社である。高い技術力とフランス人であろうデザインと発想力のあるイベントマシン会社であった。この企業のエンジニアリングマネジャー数名と私たちのミッションとによるかなり具体的で密度あるミーティング (シンポジウムと云える) によって、大きな興味あるデータを受け取ることがで



La Machine 社のレストランの前にて清水、石山、小坂が一休み

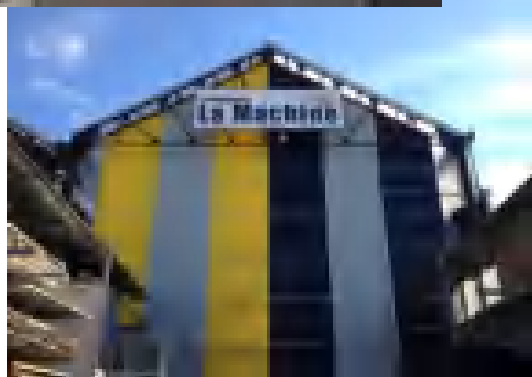
きた。この Éditions La Machine 社との 4 時間は極めて有効で意義あるものであった。

Puydu Fou については、一昨年に 3 人（清水、船山、小坂）で十分に調査できなかったことに、かなり深く切り込むことができた。それにしても、イベントとその開発力と技術力がフランスの一つの地域を活性化して、多くの国内や国外（英国、イタリア、スペイン、ドイツなど）の人々を引きつけることになっている。

びっくりすることに、一昨年（2010 年）は比較的に子供が多かったのであるが、今回は高齢者の人々の多いことは、さらにびっくりした。これからのイベントの一つのあり方として高齢者対応のあり方を示唆された。

(1) La Machine 社（9 月 13 日 11:00～17:00）

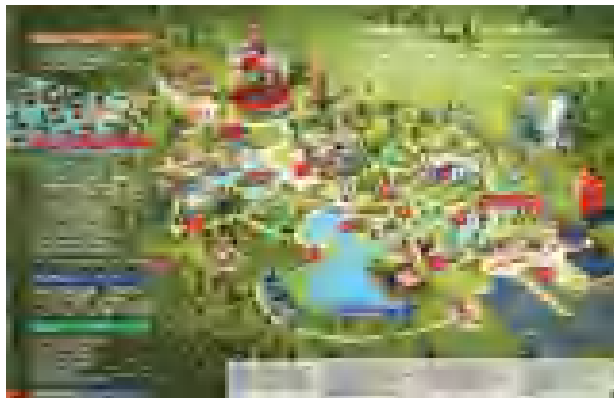
Nantes に移動して、路面電車で 15 分。フランスの造船所があったというところである。造船所の施設をナント市が所有して、新しい活用を目指した。そこに「La Machine」社が活躍している。なかなか、細部（一般的見学コースの他に）まで開放してもらった。長時間になったが、なかなか貴重で興味深い機会であった。



（細部については同行メンバーの研究報告による）

(2) Puydu Fou（9 月 14 日 10:00～25:00）

フランスでも開発の進まない一地方であった地域が、世界的な名声を得るプロジェクトを創り上げた。一つは歴史と自然を活用したテーマパーク「Grand PaRk」、一つは世界一の野（夜）外劇「SINÉSCÉNIE（ラ・シネセニー）」である。



（細部については同行メンバーの研究報告による）



Grand PaRc
水上ショーを
見ながら一休
み中(清水、石
山)

3 . Stratford & Olympic park

（9 月 9 日 13:00～18:00）

ストラドフォード駅周辺は 2012 ロンドンオリンピック開催に向け、大規模な再開発が行われ、駅の整備をはじめ、巨大なショッピングモール、カジノ等備えた施設がそびえ立つ。ショッピングモールを抜けるとオリンピックスタジアムへとたどり着く動線となっている。





この土地は元々鉄道工場、貨物ターミナルであったため敷地は

広大である。この地域の開発は大きな意義がある。



ショッピングモール。周辺にはカジノ等も併設、この日はパラリンピック閉会式があり人通りも多く交互通行がされていた。

4 . ST PANCAS RENAISSANCE Hotel

(9月11日8:00~)

King Cross Station 近くにて、シンポジウムができた。JETRO London 所長有馬純氏を招き実施した。

主なテーマは「London Olympic の効果・London における今後のこと・」を中心にして意見交換をした。

貴重な見解があった。当初はロンドンでもオリンピックの支出に対する市民の批判があった。(東京と一緒に)しかし、実施して見解は大きく変わった。「オリンピックをした」といったレガシーを大事にしている。賛成は 90%近くになっている。た



St.PANCRAS R.Hotel にて。(ジェトロ LONDON 有馬所長と清水、石山、小坂)

だ、余りの過剰反応もあり、当初のソフト運営には大きな反省がある。等々、生々しい見解と実態を知るようになった。

. 考 察

この度の調査研究では、多くの情報や現地での実際を把握することができた。その中で主な点について考察する。

1 . ロンドンオリンピックの評価

(1)経済効果

オリンピックの効果について、中心的な数値に経済波及効果がある。オリンピックは開催国の効果ばかりでなく、さまざまな影響(効果)が世界各国に生まれる。電通総研がロンドンオリンピックにおける日本国内の消費経済効果を算出して推計値を発表した^(注1)。その数値は、直接的な消費押し上げ効果は3,687億円。波及効果全体で8,037億円としている。

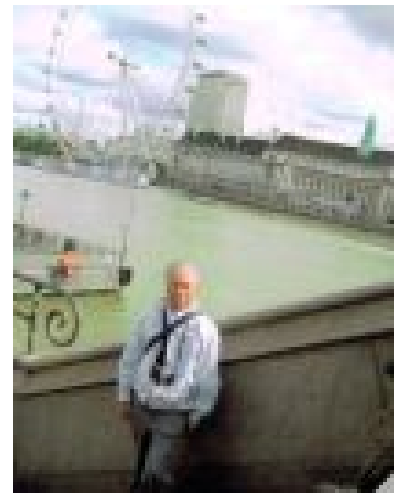
日本においてもロンドンオリンピックの経済効果が、かなり大きな数値が発生している。

さて、開催国であるロンドンはどうなっているか現地で聞き取りをした。ロンドン大学を中心とした研究では、日本円に換算して1兆8,000億円(2012年9月)と発表されていた。これは直接的な押し上げ効果の数値と表現している。

実際のところ、テムズ川には日常生活用の舟が川岸にずらりと並んでいる。

その理由は、ロンドン市内の不動産派極めて高く、借家にしても高い。そのような背景で、オリンピックによって未整備であった。

Stratford の開発と Olympic Park の広大な



テムズ川の石山氏と水上生活船(左側)

地域の開発による不動産価格の上昇を考えると10兆円と呼ばれている。選手村の建物もアパート・マンション等の住居やオフィスとして活用の計画でできている。このようなことを考えると10兆円の効果は間違いないように思われる光景を目にした。

2. 文化的効果

London-King Cross や London 市内での聞き取りでさまざまなことが分かった。オリンピックの開催の初期は、ソフトプランがあまりにも計画が厳しく立案されていたため、ホテルの予約の難しさで空き室も出た。また、警備等のアテントメンバーが予定された人数が集まらず軍隊が急遽対応する事態があった。

ホテル等の室料が高いことと予約の厳しさで、フランスに宿泊を取り、ユーロスターでオリンピックに通った人々がかなりあった。この事実は宿泊予約・室料の厳しさだけであっただろうか。

私共もロンドンからフランスに移って、はっきり理解したことがある。

食事文化が全く違うのである。ロンドンの食事は値段が高く余りおいしくない(写真参照)。パリに移りすぐにカフェに入った。やはり美しくうま



King Cross のホテルのブレックファースト(4,000 円程度)



ロンドンのランチ

い。デザートのアイスクリュームを口にして、何かほっとした(写真参照)。フランスは食文化を大切に



フランスのカフェのミニランチ

にしていると思った。

ロンドンオリンピックは大成功で「実現してよかった」と市民は皆が述べていた。一方で隣国のフランスにも相当大きな効果があったと直接聞いた。オリンピックの効果は大きくさまざまな地域に波及することがよく分かる。

3. フランスにおけるイベントの意義

(1) 地域再開発

フランスの Nantes 市は、イベント企画・制作会社の La Machine 社がある。今や世界的な企業になっている。

この企業が、このナント市に立地した条件として大きな要素は、このナント市が長い間造船基地であった。しかし、造船の需要が減退して、ナント市の地力が小さくなりつつあった。そこで市が公的資金の投入を含めて全面的な支援で La Machine 社を育成した。工場も造船のままで、大きな建屋・大きなクレーン等々極めて都合よく機能している。ナント市の地域活性化にイベント製作が繋がっている。

工場内には見学コースがあり、極めて高い料金(20~30 ユーロ)を取りながら、フランス国内、むしろ国外からの見学者が極めて多かった。幸に、私共は見学ルート外での調査もさせて貰った。

(2) イベントによる文化と産業の創造

Puydu Fou の開発は、一人のこの地域のリーダーの発想から生まれた。地域の歴史を活かした物語をイベントとして展開している。イベントは本物に徹底している。そのために、衣装用の織物、

建築物、動物（馬、豚、鳥など）などの利用によって、この地域に産業が生まれ、雇用も増大して地域力を形成している。単に観光というだけのものだけでなく、総合的に地域ぐるみの産業化をしている。その全てがイベントの展開とつながっている。

．これから

ロンドンオリンピックの実際を現地で研究でき、オリンピックの意義を改めて再確認した。2020年の東京オリンピックは是非とも実現されるように活動しなければならない。

フランスでの文化とイベントのあり方は、訪れる度に感ずることが多い。

この度の調査研究のツアーでは、極めて多くの成果物を入手した。今後はこれらのデータを整理しつつ改めてイベントの意義と機能について研究を続けたい。

【注】

電通総研は平成24年3月28日に、2012年ロンドンオリンピック（開催地：ロンドン、開催期間：7月27日～8月12日）に関連する日本国内での消費経済波及効果を、独自のアンケート調査結果を基に推計した。

今回の試算では、ロンドンオリンピックに関連する直接的な消費押し上げ効果は3,687億円（表1）と推計され、内訳としてデジタル家電等（薄型テレビ、BD/DVD録画機、BS/CS機器、PC等）に対する支出が2,353億円、グッズ等購入支出が612億円、飲食関連支出が498億円などと推計した。さらに、上記の直接的な消費押し上げ効果は、さ

まざまな部品調査等を通じて、中期的にはその約2.18倍の計8,037億円の生産を最終的に誘発するものと予測される。

表-1 ロンドンオリンピックによる消費押し上げ効果

費目	金額 (百万円)	構成比
観戦・応援等ツアー代金	272	0.1%
電気料金	11,208	3.0%
デジタル家電等購入費	235,295	63.8%
薄型テレビ等購入費	78,680	21.3%
BD/DVD録画機購入費	48,421	13.1%
スマートフォン、タブレット端末購入費	11,753	3.2%
パソコン購入費	31,979	8.7%
3Dテレビ、スマートテレビ購入費	29,168	7.9%
光回線・ブロードバンド等加入費	3,761	1.0%
BS/CS等有料放送加入料	31,533	8.6%
飲食費	49,816	13.5%
自宅飲食費	32,659	8.9%
外食・飲食費	12,962	3.5%
外食・交通費	4,195	1.1%
グッズ等購入費	61,162	16.6%
グッズ・CD購入費	24,948	6.8%
ユニフォーム等購入費	17,621	4.8%
コンテンツ等購入費	18,592	5.0%
新聞・雑誌等購入費	8,318	2.3%
その他	2,626	0.7%
総計	368,697	100%

【参考文献】

- ・天野恵一編著(1998)『君はオリンピックを見たか』社会評論社
- ・西田善夫著(1991)『オリンピックと放送』丸善
- ・マイケル・ペイン著 保科京子・本間恵子訳(2005)『オリンピックはなぜ、世界最大のイベントに成長したのか』サンクチュアリ出版